

# 英語科

## 英問英答における発問のくふう

鈴木 克彦

【抄録】 高校英語Ⅱにおける指導で英問英答を行なう際、生徒と題材を結びつけるような質問を行なった。また質問のレベルや発想を変えていくことで、コミュニケーションをとぎれさせないようにくふうした。

【キーワード】 コミュニケーション、発問のくふう、redundancy

### I コミュニケーションをねらった英語科特有の発問

リーディングを念頭において、英語で生徒に質問するとしてみよう。国語の質問と比較すると、極めて自明のこともあえて問うことが英語科ではよくある。この場合、発問は理解力の測定のためや言語形式の理解度を試すテストとなっている。つまり言語操作の技能を習得するためには、自明のことであるが故に、発音とか文法などの言語学習特有の面についてチェックがしやすい。従って事実確認的質問が多用され、その受け答えを通して、語法や発音、語彙などを習得させることか可能となる。

だが、ここに一つの矛盾が生じてくる。英語の習得は、英語話者間のコミュニケーションの手段の獲得をめざすものである。習得の段階におけるコミュニケーションは必要ないのであろうか。実際のコミュニケーションとなれば、communication gapを埋めるべく、ことは対話者間を行き交い、水の流れがその高低差を均一化するがごとく情報の差を均していく。コミュニケーションは極めて力動的な関係の中に成立するものであり、経験を深く積むことでよりよいコミュニケーションが可能となる。英語の教授・学習段階でこのような経験を生徒に与えることは意義がある。

表現形式の練習、定着はそれ自体コミュニケーション活動とはならない。fact-findingな質問ばかりでは、大切なものを欠いた状態で学習が進められることになる。ではどうするか。コミュニケーションというからには、生徒の考え・気持ち・意見を引き出すような発問であるべきである。しかし、言語形式の発問も語学習得である以上、必要不可欠なものと考えられる。あまりにもここで、言語形式の習得とコミュニケーションの両者が対立していて、一方が他方を駆逐することで、授業が成功するかのごとく論じてきたが、そうではない。まさにここに英語科特有の発問のしかたの姿勢が浮かび上がってくる。発問群をどう構成するかと

いう「ストラテジー」を教材、その提示のしかた、生徒の知識・技能・態度から決定することになる。事実に関する質問 (factual questions)、推論を求める質問 (inferential questions)、判断を求める質問 (judgemental questions) などを前記の条件からどう配分するかがコミュニケーションの鍵となる。

### II 授業形態または指導課程と発問の質

英語の質問をする場合、どんな授業スタイルで、あるいは授業のどの場面で英語の質問を行なうかか、質問の内容や構成が違ってくる。

- (1) 導入時の Oral Interaction 用の発問：生徒は教科書を見ないで予習をたよりに英語の質問に答える。問いの量はもっとも多くなる。英語を通して内容理解をさせるため質問の質、レベル等考える必要がある。
- (2) 教科書の内容を深めるための発問：生徒は教科書を見ながら答えることも可能。和訳との併用も考えられる。いろいろな答の出る可能性のある質問を与える。
- (3) まとめの段階の発問：内容把握は何らかの方法で終わっているため、本文を別の角度から読み直す視点を与える質問を考える。あるいは、生徒と本文を結びつける質問を与える。

多様な生徒の構成をもつ目的で選抜されてきた本校の生徒は、英語科の視点からすると最もその影響をうけている。高1から学力差がかなりあり、クラス単位の一斉授業では、指導をどのレベルの生徒にも合うようにするのは非常に難しい。そこで、和訳も併用することで「(2)教科書の内容を深めるための発問」の方法を採用ことにした。

発問は次のような視点をもって、構成してみた。

英文解釈の復習として行なう。fact-findingな質問が中心とはなるが、コミュニケーションをねらったものとなるように構成する。

### Ⅲ 展開事例 1

発問 ——コミュニケーションへの鍵——

PIONEER ENGLISH II (開拓社) Lesson 7 を使って  
内容：グレッグという少年が芝刈りやごみの再生など  
廃物利用を通しての環境保護を訴える論文を新聞社の  
懸賞論文に応募し見事賞を得るまでの話。

授業での英問英答、主に各 part の解釈が終った後  
復習として行なっている。またとくに英語の使うこと  
を目的とするため、10分ほどの英問英答は日本語使用  
を避けることを心がけている。

実際に行なった質問とその解説

- a. Now, everyone, are you ready to start English questions?
- b. If you are interested in fishing, you must have touched a worm. Have you ever touched a worm?
- c. What was the news Greg brought, when he came back home?
- d. I don't like worms. How about you? Do you think Greg liked worms? Why?
- e. What was Greg's mother's question, when she heard about the worms.
- f. Tell me the answer he gave her.
- g. What was she doing, when she asked that question?
- h. Was his mother happy or unhappy, when he could find the way of getting money?
- i. What was she going to add to her pile of trash, when she agreed on Greg's idea?
- j. Was she surprised, because Greg tried to stop her throwing away the old things?
- k. What was his opinion about not throwing away the junk?
- l. What do you think of his opinion? Are you for or against? Why?
- m. What did she remember when he said that?
- n. What did the letter say?
- o. Was he excited or not when he read the letter?
- p. What did Greg write about in his essay?

質問の内容はその機能から次の3点にわけることができる。

- ① レディネスや理解度を確認する質問
- ② 理解を助ける質問
- ③ 考えさせる質問

上の質問を上記ごとく分類して、各質問に解説や留意点を施した。(アルファベットが質問の記号と同じである。)

① レディネスや理解度を確認する質問

- a. 英語で話すぞという気合いを、この発問で生徒も教師も行なう。
- b. d. 個人の経験、感情を活用する。釣りの好きな生徒をあててやると得意そうに Yes. という言葉が返ってくる。

② 理解を助ける質問

- c. e. f. g. i. j. k. m. n. o. p. 主に事実の確認に終始したことになるが、こうした質問は改まってより、訳読中心の授業であっても随時挿入して行なうことが多い。例えば、という文に出会えば、と問うてやる。教師の方も、生徒の方も stress が少ないよい方法だと思う。文の構造も英語の質問という形で却って、訳出するよりもわかりやすくなる場合もある。

③ 考えさせる質問

do you think というフレーズを入れることで、生徒の考えを引き出す。グループやペアで考えさせてもよい。

### 反省

- (1) 視覚に訴えるもの(地図、写真など)を持ち込んで、それについての話が導入となるようにするのも一つの手立てである。中学に比べて、こうしたことをあまり高校では行なわないが、取り入れたい。
- (2) 知識の有無を確かめるというより、一種の guessgame のような質問をもっとくふうしたい。
- (3) 話題をなるべく生徒の生活と関連させ、題材に対する興味をひきだす。そのためには生徒についてよく知ることも英語の教材研究となる。
- (4) open-ended questions を与えることで、生徒に考えさせることができる。あるいは教科書には直接の答になるような文はないが、生徒に類推させ、自分の英語で答えさせることができる。

### Ⅳ 展開事例 2

問題点 ——redundancy 利用の必要性——

Lesson 6 A Great Moment in World Cup History (本文の英文省略)

内容：1950年のサッカー、ワールドカップでブラジル対ウルグアイの息詰まる試合展開やファンの熱狂振りについての英文である。

本文については、和訳、語句、文法説明が済んでおり、復習として英問英答を行った。fact-finding のための質問は解釈で行なっているので、英語の表現を確かめるぐらいのつもりで factual questions を配し、生

徒の考えや身近なことがらについての質問や教師の考えをおりませながら英問英答を行なった。

導入の会話

T Have you ever seen a soccer game?

(机間巡視しながら複数の生徒に同じ質問をする英語学習の緊張感を高める効果。)

S Yes (短答で構わない。creative とは言えないが communicative である。)

T When did you see it? (Yes. と答えた何人かの生徒のひとりに尋ねる。)

S When I was a junior higt school student, I say it.

T Was it interesting?

S No

T Do you know Tetsuo Nakanishi, who is a member of Granpass Eight?

S No

T He is a professional soccer player He graduated from this school Do you want to see him?

S Yes, of course I'm interested in J league.

(長い答自発的に返って来たときはこの会話は successful であると言えないだろうか。)

本文の展開 内容展開の順を追って質問する。

(1) T Where was the World Cup Final of 1950 played? S (無言) T Where was the World Cup Final of 1950 played? S (無言) T Where did they

have the Workd Cup Final of 1950? S. (無言)

T Did they have the World Cup Final of 1950 in Brazil or Uruguay? S あっ In Brazil T That's it.

(2) Brazil is one of my most favorite coutries in the world because of the great carnival Do you like Brazil? S Yes, I like it, too

T For the same reason? S No I like soccer. Soccer is very popular in Brazil

(3) T (黒板に Rio de Janeiro という文字を書きながら) Do you know how to read this word? Read it

S Rio de Janeiro T In what country is Rio de Janeiro? S In Brazil

(4) T Was the stadium big or small? S It was big T How many people could be admitted? S One hundred seventy-five thousand people T Yes, really big By the way, how many people can stay in the Mizuho Stadium? S I don't know T Neither do I But maybe twenty or thirty thousand, I siess 以下省略

解説 (番号は上述の問答の番号を表す。)

- (1) 生徒が答えない原因を素早く予測して、質問のレベルを減じたり、質問の内容を分析したりする下位の質問文を構成することで、答を引き出す。 本校の場合ほとくにこの技能をみに受けないと身につけないと、英問英答は継続できない。
- (2) 蛇足となるような内容だが、題材への興味をかきたてるために教師の考えを入れることも大切。生徒がうまく話にのってくれば成功と言える。
- (3) 自明であることがらも英語に慣らす意味で、この種の質問を入れる。本校のように生徒の学力レベルが多様な場合、必要と思われる。
- (4) 話題をなるべく生徒の生活と関連させ、題材に対する興味をひきだす。

## 反省

redundancy 利用の必要性

英問英答で困るのは、無言の返答だ。どうして答えが返って来ないかと焦れったくなくて、単に英語力がないだけで済まそうと思うと、英問英答は継続できなくなってしまうか communicative なものではなくなる。生徒の身近なことと関連付けたいろいろな質問を考えることは教師としても楽しい教材研究である。しかし、もっと基本的な面で発問のしかたのくふうが必要などときがある。

そこで、教師が心がけたいことが redundancy 利用である。コミュニケーション活動の途中で問題が起きて意志の伝達が困難になったとき、言いたいことをなんとかして伝えたり、話題を得意の分野に変えたりしてうまくコミュニケーション活動を続行させる能力を方略的能力 (strategic competence) と言うそうだが、教師の方から生徒に向かって行なう場合はむしろ teacher talk と言った方が適切かもしれない。言い回しを変えたり、伝達の発想を変えたりして生徒に英語をわからせる方法は、生徒の困難点をすばやく分析し、英語の問いの形で伝達を続行することだ。この際、生徒の方からも communication strategy として、<sup>(1)</sup> “Pardon?” “What does ~ mean?” などの英語が口に出るよう、Classroom English に慣れさせておくことも、コミュニケーションの挫折からスムーズに脱出することができる有力な手立てであろう。

## 参考文献

- 高梨 庸雄『発問と授業の活性化』  
新里 真男『内容を深化させる発問・考えさせる発問  
現代英語教育1992 12月号